

災害ボランティアネット通信

2018 年版

NPO法人

災害ボランティアネット

茨城県古河市水海三〇一九

Tel 0280-91-3090

Fax 0280-23-2281

<http://saigaivolunteer.net/>

被災地に生きる人々にと
つて、仮設住宅からの転居は
大きな進展であります。
しかしそれは、今まで築い
てきたコミュニティを失う
ことにつながるのではない
かという不安を抱えています。



次々と建設されていく復興住宅 (2018 年 6 月 二子中央地区)



資材の規格が同じなので、建設
スピードがきわめて速い
(2018 年 6 月 雄勝地区)

宮城県石巻市では、二〇一
八年七月をめぐりに、仮設住宅
を閉鎖する動きが進んでいま
した。
それに対応するため、市内
各地では「復興住宅」の建設
が急ピッチで進んでいます。



住宅と同時に作られる、巨大な防潮堤。やはり「防災インフラ」を第
一に考えた街づくりとなっている (↑ 2018 年 6 月 雄勝地区 ↓)



2018. 6. 8

仮設住宅の閉鎖、復興住宅への転居に向けて：

かせつじゅうたく

へいさ

ふつこうじゅうたく

てんきよ

私たちの支援活動は、復興
住宅へ転居してもコミュニ
ティづくりの活動を継続し
ていきます。

人と人をつなぐ

～東日本大震災から今年で七年目～

忘れないでください

今も五つの仮設住宅にかかわっています。現在は食事に困っているということはほぼないので、炊き出しの必要性はありません。それでもラーメンなどの食事を提供しています。ただ食事を提供するだけでなく、食を囲んだコミュニティ（共同体）作りを大切にしています。

先日も「皆さんの顔をみると元気がもらえる」と書かれたお礼の手紙をもらいました。

自分たちのしていることは小さなことかもしれませんが、自分たちが会いにいくということが、震災に遭った方たちにとっては大きい

ことなのだと感じています。

「忘れないでください」

これは被災地で何度も耳にしてきた言葉です。震災から時間が経ち、被災地に足を運ぶ人がほとんどいないのが現状です。その中で、継続して関わりを持つということが大切だと考えています。



桜の中のキッチンカー

被災者の声に耳を傾ける

被災された方々は、大切な人やものを多く失いました。家、家族、故郷、友人、学校等々。

「津波で死んでしまった方がよかったのではないかと考えると、眠れない時がある」

と何度もお聞きしてきました。海や大地とともに生きてきた方たちにとって、海から遠く離れた仮設住宅での暮らしは、住み慣れた風景を失った暮らしでもあります。

人それぞれ大切なものは違いますが、喪失体験の中で自暴自棄になったり、ふさぎ込んでしまう傾向もあるように思います。大切な人を亡くした経験から、なかなか前向きになれない方も大勢いらっしゃいます。

そうした様々な喪失体験に耳を傾けることが必要だと思います。

仮設住宅の暮らし

仮設住宅では、炊き出しに顔を出してくださる方ばかりではありませんでした。炊き出しの場所までも出てこられない方、そういう所に行きたくないという方もいます。また足もとがおぼつかず、行きたくても行けないという方もいます。

はじめは、一軒一軒を訪問して声をかけることまでできませんでした。が、「あの家に行って行つて」と言われ、食事を届けに行くこともありました。

現在は、事前に訪問する日にちを決め、チラシを送り、広報してもらっています。十七時くらいから十九時くらいを目安に食事を提供しています。

震災直後は、仮設住宅にいた時間が長かったので、一年から三年たつと仕事

に向かわれるようになったり、外に出ている時間が多くなった方もいます。

現在、仮設住宅にお住まいの方は、当初の半分以上の数です。仮設ですから六年も居ることを想定していないので、建物の耐久年数はとうに超えていて、補強をしながら生活をしています。

よく「まだ仮設に住んでいる人がいるの?」と言われることがあります、いまだ仮設住宅で暮らしている方がいるということを知ってほしい、忘れないでほしいです。

思いを汲み取る

現在、仮設住宅に残っている方たちは、復興住宅ができるのを待っている状態です。復興住宅の工事が遅れる中、自主再建できる若い世代は先に出て行かれた方もいるので、残っているのは年配の

方が多い傾向にあります。再建ができる方はいいのですが、年齢のこともあり、これから借金をしてまで家を建てるのが困難な方たちの生活が、今度どうなっていくのか気にかかっています。



食事をとりながら、それぞれの思いを語り合い、そこに縁が結ばれる。

時間が経ち、自分たちがもと居た場所、もとの状況に戻りたいという意識が強いことを感じます。しかし現状はそうはなっていないません。原発事故の問題もあります。復興住宅と呼ばれるところに住み移っても、決して元に戻ったわけではないのが現状です。

被災地の方と話をしていると「震災という出来事を忘れていけない」という思いと同時に、「自分たちの今までで過ぎてきたことを忘れたくない」という思いを強く感じます。そういう人たちの思いを汲み取って、みなさんと今後に向けて話をしていくことが大切なんだと思っています。

つながりを持ち続ける

震災の被害に遭いながらも助かった人たちの中には、孤独死をされている現状があることを知ってほしいです。

復興住宅へ生活の場が代わっていけば、今まで仮設住宅で築いてきたコミュニティが解体されていきます。それにより「孤立」「孤独」が問題となっていくます。さらに「人と人をつなぐ」支援が必要です。

ボランティアとして関わったきっかけは何だったのかとよく尋ねられますが、理由はありません。身体が勝手に動いたとしか言いようがありません。

ただ難しさを感じるのは、継続することです。正直、現地に足を運ぶこちら側も一年一年状況が変わってきています。しかし、待っている人がいます。つながりを持ち続ける、身体を運び続けることが大切だと考えています。これから現地へ行き、この目で確かめ、「風化」させないためにも、現状を伝え続けていきたいと思っています。

* * *

この文章は、二〇一八年三月十八日発行の『「仏教ライフ」春彼岸号』に掲載されたものです。

七回目の『3月11日』

雄勝町水浜地区での座談

二〇一八年三月、私たちが訪れたのは「雄勝町水浜地区」の復興住宅。そこに住む方々は、この七年間を共有してきた方々です。

七回目の三月十一日を迎えて、この七年間を振り返っていたきました。



水浜地区の復興住宅集会所にて、この7年間を振り返り、語り合う（3月14日）

七年目も一年目も、

気持ちは同じです

Aさん「普段の生活は六年間でずいぶん変わったけれども、気持ちは全然変わっていない。立ち振る舞いは明るくやっているけれど、何かで一瞬考えるときは、やはり七年前の三月十一日も七年後の三月十一日も同じ。

ここ水浜地区の人たちよりも被災がひどい人もいるし、そういう人を天秤にかけるわけにはいかないんだけど、私たちは本当に幸せだなと思っています。

水浜にいいること自体が幸せであるし、生まれた場所を離れていった方はそれなりに



私たちが一番最初に水浜地区に行ったとき、避難所となった「水浜保育所跡」（2011年5月12日）

苦勞していると思います。隣近所の誰も居なくて、話相手もないというし。

私たちは水浜にいるから、このようにみんなで集まってくれる仲間がいるから、それは震災前も震災後も変わらな

い。それが水浜のよさであると思います。

炊き出しなくても

いいんだよ

Bさん「ただ来てくれるだけで。顔を見るだけで、遊びに来てくれるだけでいいんです。

何か同じものを共有できるといいんだよ。ボランティアの中でも、一番長くいてくれた、親しみもあるし、本当に親戚の人みたいな感じで。

一緒に来てくれる若いメンバーも、なんか孫みたいな感じなんだよね。

『子供ができました』なんて話を聞くと、すごくうれしいね」

* * *

Cさん「七年目も一年目も、気持ちは同じです」ってあったけど、本当にそんな感じ

だよ。

毎年この日、朝起きた時に、ニュースで震災のことが報道されると、あの日のことを思いだすんだよ。火事になったこと、雪が降ったこと。本当に大きなボタン雪が降ったよね。すごく寒かった。

あと十日も連絡取れなくて、もう死んだものだと思ってた人もいたよね。話題にするのが怖くて黙っていたけど、十日も連絡がつかなかったから、もう死んじやったんだらうとか考えていたけど、本当生きててよかった」

* * *

米粉の団子と

ツバキの花で

Dさん「みんな揃って生きていたってことが不幸中の幸いだった。みんなの声に支え



太陽光パネル以外の電気がない状態で、水浜の人たちは助け合って暮らした（2011年5月12日）

られた。
この海で亡くなったのは若い女の子が一人、あとお嫁さんだった人が一人、そしておじいさんが脳梗塞で震災後すぐに亡くなった。
その三人の遺体も避難所に寝かせていて、二日も三日もその隣で寝たんだよ、私ら。亡くなった方と一緒に寝るなんて。



ともに炊き出しをしてきたこともあり、ここ7年間の思い出話にも花が咲く。

さすがに臭ってきたから、納屋にゴザひいて、せめて寒くならないようにゴザかけてね。警察に言っても、引き取れないっていうし。
男たちが板切れでお棺作って、土葬したんだよ。米粉もらってきて団子作って、ツバキの花あげて、線香あげてね」

Eさん「あの状況で、そこまでするってことがすごいよね。米粉の団子までよく作れたっていうか…」

* * *

改めてお話を聞き、今まで知らなかったことや、話せなかったことを聞かせていただきました。

あらためて、皆さんはこの水浜で生きている、ということを実感しました。

またこれからも、よろしくお願ひします。

Dさん「そうだね、本当にそう思う。お棺は近所の畑を借りて埋葬したんだ。その後家族の人が引き取りに来て、掘り出して車に積んでいったときも、特に問題はなかった。警察の人にも喜ばれたし、亡くなった人のおばさんも、検体のところに並べられて、うちの人の顔だけきれいだったって言ってくれた。
こういうことも、震災にあわなければ絶対にできなかったと思う」

復興住宅のあれこれ

宮城県石巻市にて、被災者用仮設住宅が建てられ始めたのは二〇一一年六月ごろ。そこから次々に仮設住宅が作られていきました。

仮設住宅の耐久限界が来る前に、本格的な住居を用意しなければならぬ。そのため石巻市が注中心となって計画されていたのが、「市整備型

復興公営住宅」です。二〇一五年に第一号となる大須復興公営住宅の完成を皮切りに、市のいたるところでの建設が始まりました。

水浜地区などの漁村に復興住宅が建てられ始めたのは、二〇一七年からですが、やはり「防災設備」と、その建設

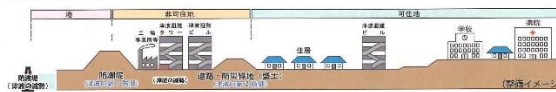
土地利用の基本的な考え方ー市街地部ー

◇災害に強く安全安心でコンパクトなまちづくりのための土地利用



◇津波防御の考え方

二重の防御（堤防または高塩土道路等）で津波を減勢し、住居、学校、病院等を内陸側の可住地に配置



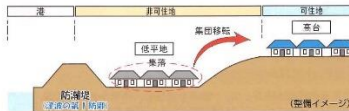
土地利用の基本的な考え方ー半島沿岸部ー

◇津波防御の考え方

津波の危険性の少ない安全な高台へ住居を集団移転

◇移転に伴う跡地利用

豪雨と高潮が重なっても冠水しない安全な地域とし、臨の場として利用できる環境を創出



「石巻市復興基本計画」の概要。防災のための施設を第一に考え、ついで生活・産業インフラと、優先順位を統一させた都市計画を、市全体の復興とともに実施させようとしている。



雄勝地区の工事現場。防災設備である防潮堤を建設しているが、そのためには大量の資材・人員を運ぶための「道路」を建設しなければならず、その資材・人員を維持し続けるための「宿泊施設」「保管施設」も必要だ。それゆえ、まず中心都市に近い場所から復興は進められていかざるを得ない。

防災のため、高台に建てられている復興住宅ですが、実際に行ってみると眺めがよく、潮風がとて心地よい住宅地です。

「どうだい、一区画買つて別荘にしてみないかい？大歓迎するよ」

すでに移り住んでいる方が、笑いながらおっしゃっていました。



さわやかな海風が吹く高台の復興住宅。被災者以外でも実際に土地を購入し、住宅を買うことも可能だという。

NPO法人 災害ボランティアネット 収支報告書

(期間：平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日)

前年度繰越金	¥3,430,076	
収入総額	¥2,411,785	
支出総額	¥2,274,291	
差引残高	¥3,567,570	次年度へ繰越

正会員・賛助会員・寄付者 (敬称略・順不同)

(期間：平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日)

葦原 由美子、阿部 美恵子、阿彌陀寺(長須)、荒川 保、飯貝 宗淳、飯塚 久江、池田 幸裕、石川 真樹、伊藤 賢、井上 知子、今泉 温資、岩城 芳文、岩松 知也、因宗寺 柏女 有教、梅溪 得文、雲國寺、江森 信市、円鏡寺、大塚 展彦、柿沼 正男、加藤 誠(雲国寺)、桑原 正信、光円寺 菊池 弘昭、光照寺 池田 孝郎、光照寺 土肥 真、光明寺 三浦 大悟、光了寺、古賀 洋子、小島 貴弘、小代 久美子、孤野 やよい、狛一、近藤 龍磨、西岸寺 友松 雅英、齊藤 操、笹本 伸一、佐伯 朋子、澤田 恵子、塩塚 力也、島村 宣澄、正應寺 佐々木 誠正、正恩寺、正覚寺 山吹 照久、浄願寺、勝願寺 井上 証、乗願寺 鈴木 友好、正行寺、浄真寺 前田 義朗、浄泉寺、浄善寺、勝善寺 井上 孝昌、正蔵寺、聖徳寺、称念寺、常福寺 八田 信雄、照明寺 和田 英昭、真行寺、真照寺、隨専寺、Studio-Pop hair 樫山達也、専行寺 平松 正信、専西寺 青樹 潤哉、宗善寺、宗泉寺 旦保 立子、相馬 法道、存明寺 酒井 義一、多賀田 晴美、田上 翼、田口 岳、田口 千尋、託法寺、武部 勝義、多田 依子、玉川 喜美江、玉寄 富仁枝、智願寺、聴法寺、長命寺、通覚寺、塚寄 洋子、東京四組 佐々木 誠信、東京教区、東弘寺、徳因寺 稲垣 直来、徳蔵寺、永藤 松男、中村 由美子、成澤漁業、並木会館(霜満)、西蓮寺 白山 勝久、延岡 潤照、梅寿 光殊、橋本 コノミ、橋本 はる子、秦 秀人、服部 吉高、東出 睦治、樋崎 菜々、平野 喜之、深栖 将稔、藤津 裕子、藤浪 遊、藤場 芳子、法雲寺、法善寺、本誓寺、本多 雅人、本伝寺 淵上 知明、増田 宣夫、松野 祐、松本 きみ子、三池 真弓、mio 鍼灸整骨院、水谷 豊、光林 忠明、宮地 修、宮武 真人、宮本 栄子、妙安寺(一ノ谷)、妙安寺(みむら)、明超寺、妙徳寺、明福寺、梁河 文昌、山田 和江、山中 なつ、唯信寺、(有)谷駒、横田 洋、吉田 幸代、来応寺 堀 秀隆、了因寺 門徒会、了因寺 吉岡 康裕、蓮慶寺、渡辺 ウメ子、渡辺 久美子、小倉 美栄子、小島 森一、小島 真知子、



皆様の温かいご支援に心より感謝申し上げます。
尚、今後も支援活動を継続していきますので、
引き続きお力添えをよろしくお願い申し上げます

福島の子どもたち

「子どもたちを、放射能を気にしないでいい場所で、思い切り遊ばせたい」

福島県で生活を続けているお母さんたちの願いに込め、今年の夏も日本中各地で「福島の子どもたちを受け入れよう」という保養活動が続けられています。



2017年夏「福島子ども保養基金」の保養旅行。
北海道・秋田・三重等の団体が支援している。

その一方で、県外に子どもたちを遊びに行かせることが、

「福島県がいまでも汚染されていることを広めるようなものだ」

「放射能汚染の風評被害の原因となる行動だぞ」と非難の声が挙がりま

す。
震災から七年が経っても変わらない福島の人たちの現実。その悩み・苦しみはまだ続いていることを、私たちは知らないでいます。

私たちNPO法人 災害ボランティアネットも、保養事業を支援し、活動に協力しています。

ご協力をお願い

「NPO法人 災害ボランティアネット」は、現在も支援活動を続けており、また活動を支えてくださる、「正会員」「賛助会員」を募集しております。

また、ご寄付も随時受け付けております。左の口座の他にも、「クレジットカード」「コンビニ振込」「ペイジー振込」などの方法で受け付けております。

詳細は、ホームページをご覧ください。左のアドレスにアクセスするか、「災害ボランティアネット」で検索すれば、一番最初に見付かります。

振込先… ゆうちよ銀行

加入者名… NPO法人

災害ボランティアネット

口座番号… 00110-418730

ホームページ…

<http://www.saigavolunteer.net/>

訂正とお詫び

「災害ボランティアネット通信 2017年版」

正会員・賛助会員・寄付者

誤… 担保立子
正… 旦保立子

ここに訂正し、お詫び申し上げます。

編集後記

今年も、西日本の水害、日本中での酷暑、迷走する台風と、様々な自然災害が多発しました。「何とかしてあげたい」という心はあれど、そう簡単に動けない現実、板ばさみです。

(文責・大内崇久)